

講義コード	1116520003
講義名称	心理学A 03<春>
科目英文名	Psychology A
開講責任部署	社会学部 社会学科
代表ナンバリングコード	0PSY2400
単位数	2.0
時間割	春学期: 火曜日 2 時限
講義開講時期	春学期

担当教員

氏名
中村 隆行

授業形態	講義
------	----

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 小レポート/小テスト
---------------	--

講義・演習概要	心理学は、人の心のしくみとはたらきを科学的に探究する学問として発展してきた。この授業では、これまで心理学が研究対象としてきたさまざまな領域で明らかにされた基礎的知見と研究成果を概説する。「心理学の研究法」「心のしくみと認知」「心のはたらきと行動」「個人と社会」「人の成長・発達」の各領域に分けて心理学の基礎理論を取り上げ、一般的包括的な内容構成に基づき講義を行う。学びの深化とともに、社会や教育現場で役立つ批判的・論理的な思考・判断能力の向上を目指す。
学習（到達）目標	・ 科学としての心理学の基礎理論および心理学研究上の基礎的知見・成果を体系的に理解している。 ・ 子どもの心の発達と発達要因について理解している。 ・ 日常生活におけるさまざまな心理社会的行動の特徴について、心理学理論と研究法を応用して探究し理解することができる。 ・ 日常生活における多様な情報に対して、心理学的観点から批判的・論理的に思考・判断して適切に行動することができる。

講義・演習計画

回	内容
第1回	オリエンテーション：心理学の基礎理論
第2回	心理学の歴史と領域
第3回	心理学の研究法
第4回	心のしくみと認知①：感覚と知覚
第5回	心のしくみと認知②：記憶
第6回	心のしくみと認知③：学習（条件づけ）
第7回	心のしくみと認知④：知能と思考
第8回	心のはたらきと行動①：動機づけ
第9回	心のはたらきと行動②：情動と感情
第10回	個人と社会①：人格・性格
第11回	個人と社会②：他者と集団
第12回	人の成長・発達と心理①：遺伝と環境
第13回	人の成長・発達と心理②：ライフサイクル
第14回	人の成長・発達と心理③：心の発達
第15回	まとめ

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	
レポート	
その他	100%

成績評価の方法（コメント）	小テストを10回行い、その中央値で評価する。
---------------	------------------------

参考文献	・加藤伸司・山口利勝（編著）『MINERVA 社会福祉士養成テキストブック21 心理学理論と心理的支援 第2版』 ミネルヴァ書房 ・長谷川寿一・東條正城・大島尚・丹野義彦『はじめて出会う心理学改訂版』有斐閣アルマ
事前および事後学習の指示	・毎回講義終了後に、その回の重要事項復習用として、確認問題を配布する。次回講義までに必ず確認問題を解いておくこと。 ・講義で学習したことが、実際の日常生活のどういったところと関連しているのか、注意して生活してみること。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間

講義コード	1787160000
講義名称	日本文化研究-交流史からみた伝統と芸術B　＜春＞
科目英文名	Study of Japanese Cultures-Cross Cultural History of Art and Tradition B
開講責任部署	国際教養学部　英語・国際文化学科
代表ナンバリングコード	CULT3420
単位数	2.0
時間割	春学期: 火曜日 2 時限
講義開講時期	春学期

担当教員

氏名
片平　幸

授業形態	講義
------	----

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 小レポート/小テスト 宿題(演習問題、e-learning等)
---------------	--

講義・演習概要	本講義は、19世紀末から20世紀初頭にかけての絵画やオペラなどの芸術作品を対象に、〈日本〉イメージが西欧社会においてどのように形成され、受容されていたのかを交流史的観点から考察することを目的とする。とりわけ、異文化理解の過程において生じた理解・誤解・理想化といった諸相に注目し、世界における〈日本〉イメージの変遷と、それに対する日本側の応答のあり方を検討する。 講義では、文献資料に加え、絵画作品、浮世絵、映像資料など多面的な資料を用い、浮世絵とジャポニズムの関係性を中心に、日本文化が国際的文脈の中でどのように解釈され、再構成されてきたのかを分析する。これにより、日本史・世界史を個別に学んできた知識を横断的に結びつけ、地域や国境を越えた文化交流のダイナミズムを理解する力を養う。 本講義は、日本・東アジアと西欧との文化的交流を扱うことで、多角的な視野を育成し、グローバル化が進む現代社会において必要とされる異文化理解力や批判的思考力の基盤を形成することを目指す。
学習（到達）目標	本講義を履修することにより、学生は以下の能力を身につけることを目標とする。 1. 19世紀末から20世紀初頭の西欧における〈日本〉イメージの形成と受容について、芸術作品や歴史的背景を踏まえ、多面的に理解することができる。 2. 芸術作品を史料として読み解き、日本文化がどのように解釈・再構成されてきたのかを批判的に検討し、氾濫するイメージや情報を主体的に分析・判断する力を身につける。 3. 日本と西欧の文化交流の歴史に関心を持ち、異文化理解に伴う相互作用や緊張関係を受け止めながら、多様な文化を尊重する姿勢を養う。 4. 講義で扱った理論や事例をもとに、〈日本〉イメージの形成や文化交流の特徴について、自らの理解を整理し、論理的な文章表現によって説明することができる。 5. 日本史・世界史の知識を動員し、地域を横断する交流史的視点から、日本文化の国際的受容について自らの見解を形成し、現代の日本理解に応用可能な視点として発信することができる。

講義・演習計画

回	内容
第1回	オリエンテーション／オリエンタリズムへの導入 授業の目的、進め方、成績評価（小テスト・期末テスト等）について説明する。 あわせて、エドワード・サイードの「オリエンタリズム」概念を導入し、本講義で〈日本〉イメージをどのような視点から扱うのかを確認する。
第2回	オリエンタリズムとは何かー19世紀絵画を中心に 19世紀の西欧絵画を例に、オリエンタリズムの基本的特徴を理解する。 異文化がどのように視覚化され、意味づけられてきたのかを検討する。
第3回	オリエンタリズムはなぜ必要だったのか（1）ーサイード『オリエンタリズム』を読む サイードの議論をもとに、オリエンタリズムが成立した歴史的・政治的背景を読み解く。 知の体系としてのオリエンタリズムの役割を考察する。
第4回	オリエンタリズムはなぜ必要だったのか（2）ー理論を用いた美術作品分析 オリエンタリズムの概念を応用し、具体的な美術作品を分析する。 理論と作品分析を結びつける方法を身につける。
第5回	20世紀初頭の西洋における東洋表象（1）ーシノワズリー 中国趣味（シノワズリー）を取り上げ、西洋における「東洋」表象の先行例を検討する。 日本表象との連続性と差異を考える。

第6回	20世紀初頭の西洋における東洋表象（2） ―オペラ《トゥーランドット》 《トゥーランドット》を事例に、音楽・舞台芸術における東洋表象の特徴を分析する。 物語構造や人物造形に注目する。
第7回	20世紀初頭の西洋における日本表象（1） ―《蝶々夫人》の出現 《蝶々夫人》がどのような文脈で生まれたのかを歴史的に整理し、西洋社会における〈日本〉イメージの形成過程を検討する。
第8回	20世紀初頭の西洋における日本表象（2） ―《蝶々夫人》作品分析 音楽、演出、人物表象を具体的に分析し、《蝶々夫人》における日本表象の特徴を読み解く。
第9回	《蝶々夫人》に対する反応（1） ―日本国内の反応 日本における受容や批判、知識人・芸術家の反応を取り上げ、日本側の視点から〈日本〉表象を捉え直す。
第10回	《蝶々夫人》に対する反応（2） ―海外における反応 欧米社会における評価や批評を検討し、国や地域による受容の違いを考察する。
第11回	交流史からみたジャポニスム（1） ―ジャポニスムとは何か ジャポニスムの成立過程と概念的特徴を整理し、単なる流行ではなく文化交流の現象として捉える。
第12回	交流史からみたジャポニスム（2） ―ジャポニスムの土壌：印象派の特徴 印象派の芸術的特徴を整理し、なぜ彼らが日本美術に強く惹かれたのかを検討する。
第13回	交流史からみたジャポニスム（3） ―浮世絵の特徴 浮世絵の構図、色彩、主題などの特徴を分析し、西洋絵画との違いと影響関係を理解する。
第14回	交流史からみたジャポニスム（4） ―印象派と浮世絵の出会い 具体的な作品を比較しながら、浮世絵と印象派の相互関係を検討する。 文化がどのように再解釈・再構成されるのかを考える。
第15回	〈日本〉イメージの変遷と現代への応用 これまでの講義内容を総括し、〈日本〉イメージの形成と受容を交流史的に捉える意義を確認する。 現代の日本理解や異文化理解への応用可能性について考察する。

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	30%
レポート	
その他	70%

成績評価の方法（コメント）	成績評価は、以下の方法により総合的に行う。 1．小試験（30％）授業内容の理解度を確認するため、授業中に不定期に小試験を実施する。 2．課題提出（60％）講義内容を踏まえた記述課題を2回課す（各30％）。 3．授業への参加度・コメントシート（10％）コメントシート等を通じた授業への主体的な参加状況を評価する。 小試験および課題提出の実施時期や方法については、授業中に指示する。 評価にあたっては、 講義内容を正確に理解しているか 理論や概念を用いて、芸術作品や事例を分析できているか 講義中に扱った具体例を適切に示しながら、論理的で一貫した文章構成で記述できているか といった点を重視する。 課題および小試験に対するフィードバックは、M-Portを通じて行う。
---------------	--

テキスト

	著者	タイトル	教科書購入区分	ISBN	出版社	備考
1.						テキストはM-Portの「授業資料管理」に掲出します

参考文献	片平幸「オペラ『蝶々夫人』と日本からの応答」『メディアの内と外を読み解く』（せりか書房、2018年） 『オペラ・ギャラリー50 改訂版』（学研プラス、2017年）
事前および事後学習の指示	事前学習としてオリエンタリズムに関する基礎的な文献に親しんでおくこと。 エドワード・W・サイード『オリエンタリズム（上・下）』（平凡社ライブラリー） 小川さくえ『オリエンタリズムとジェンダー：「蝶々夫人」の系譜』（法政大学出版局、2007年）

	事後学習として課題をだします。授業中のノートとM-Portで配布する授業資料をよく読み、課題を作成して期限を守って提出すること。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間
キーワード	表象、オリエンタリズム、ジャポニズム、異文化理解、交流史、浮世絵

講義コード	1787490000
講義名称	アジア文化研究-韓国・朝鮮文化A　＜春＞
科目英文名	Study of Asian Cultures-Korean Culture A
開講責任部署	国際教養学部　英語・国際文化学科
代表ナンバリングコード	CULT2490
単位数	2.0
時間割	春学期: 火曜日 2 時限
講義開講時期	春学期

担当教員

氏名
青野　正明

授業形態	講義
------	----

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 宿題(演習問題、e-learning等)
---------------	--

講義・演習概要	近年、日本と韓国との交流が様々な分野で盛んになってきた。その一方で、現代にまで続く歴史的な問題が原因で政治的には安定しない状態がまだ続いている。そこで、この授業では日本の地から現代韓国を知り理解することを目指して、時事問題に重点を置きながら歴史や政治、社会の分野に焦点を絞って概説していく。 具体的には、歴史・地理・社会制度などの諸項目を通じて、韓国が反日ナショナリズムを乗り越えてきた過程を、パワーポイントを用いて視聴覚資料を多用しながら学んでいく。また、終盤では北朝鮮事情や在日コリアンについて学び、日本社会におけるナショナリズム問題を考察することで締めくくる。
学習（到達）目標	日常生活では正確な情報を得ることが難しいため、ネット情報に誤りが多いことはわかっていても、ついついそれらに頼ってしまう人が多いと思われる。そこで、この講義では日韓関係についての客観的な情報をベースに、韓国の置かれた状況を文化的な視点から理解していく。その過程で日韓関係を多面的に見つめ直すことにより、各回で学ぶ基本的な知識を修得する。そして、文化交流や多文化共生について自分の考えをもち、ナショナリズムを突出させないで、それを克服することを目標とする。

講義・演習計画

回	内 容
第1回	講義の流れや成績評価等の説明、韓国・北朝鮮についての概説
第2回	歴史 1（ナショナリズム教育の問題、渡来人と仏教文化の伝来）
第3回	歴史 2（秀吉の侵略、家康以降の友好関係）
第4回	歴史 3（日本による植民地支配、南北分断後の政権）
第5回	地理 1（ソウル：王朝時代の面影）
第6回	地理 2（ソウル：植民地期の残影）
第7回	地理 3（南北分断と朝鮮戦争）
第8回	植民地期の日本人 1（白衣と白磁、朝鮮民族美術館と柳宗悦、浅川巧）
第9回	植民地期の日本人 2（青磁、文化財の流出問題と保存の努力、浅川伯教）
第10回	社会制度 1（姓と本貫、創氏改名）
第11回	社会制度 2（社会的な差別、伝統的な結婚）
第12回	日韓での大衆文化受け入れ（韓流ブーム・K-POP人気までの道のり）
第13回	北朝鮮事情（支配体制など、ドラマ「愛の不時着」も少し参考にして）
第14回	在日コリアン 1（在日とは？：民族教育、映画「パッチギ！」）
第15回	在日コリアン 2（日本人とは？：アイデンティティをもつこと）

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	0%
レポート	50%
その他	50%

成績評価の方法（コメント）	「その他」は毎回の課題テストと受講態度の評価である。 許可なく携帯電話を使用すると大幅に減点する。 また、授業に出席することは当然であるため、出席が11回以上の者を成績評価の対象とする。
---------------	---

参考文献	配布プリント 金両基監修『読んで旅する世界の歴史と文化・韓国』新潮社 他にも必要に応じて授業で紹介する。
事前および 事後学習の 指示	たとえば、歴史１・２・３のように連続する分野は、それぞれのつながりに留意して、その分野を総体的に理解する。また、事前学習では各回のテーマについて図書館やインターネット（適切なサイトを選ぶ）で調べておき、事後学習では各回の授業資料をよく読み、掲載された関連サイトや資料にも目を通しておくこと。
学習時間	事前学習時間：30時間　事後学習時間：30時間

講義コード	14D6810000
講義名称	アジア産業論Ⅰ　＜春＞
科目英文名	Asian IndustryⅠ
開講責任部署	経済学部　経済学科
代表ナンバリングコード	ECON2660
単位数	2.0
時間割	春学期: 火曜日 2 時限
講義開講時期	春学期

担当教員

氏名
江川　　暁夫

授業形態	講義	実務経験のある教員による授業①	実務経験のある教員による授業②
		アジアで経済担当の外交官の経験を踏まえた授業内容	経済官庁でアジア経済分析や対アジア経済協力等を経験した者による実践的な授業内容

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。		
	コメントシート	小レポート/小テスト	

講義・演習概要	本講義は、アジア（特にASEAN）の主要各国の産業構造の状況を概観し、その形成過程と、アジア各国自身が目指す今後の産業構造転換の方向性を学ぶことを主眼とする。 具体的には、(1)ASEANという地域全体における産業の現状とその成り立ちを簡潔に俯瞰した後、(2)アジア各国の農業、製造業、サービス業の現状について、経済発展段階との関係を考えていく。これらで得た知識を用いて、(3)将来のASEANの産業の変化を予想・分析できるようにするために必要となる外的環境の変化について把握し、今後の日本とASEANの産業の関係について考察する。
学習（到達）目標	(1)アジア各国の経済をけん引する産業とその状況は千差万別であり、成長に貢献する産業の姿も、過去・現在・未来で変わっていくということを、具体的かつ大局的に理解できるようになる。 (2)実社会に出た後にも、アジアでのビジネスをより上手に企画できるようになるために必要な最低限の知識を得ることができる。

講義・演習計画

回	内容
第1回	講義概要の説明（イントロダクション）／アジアの各国経済の世界における位置付け
第2回	ASEAN各国の産業構造の特徴
第3回	ASEAN経済のダイナミズムと産業発展の国際的展開／ペティ＝クラーク法則
第4回	ASEAN各国の産業構造の特徴と所得水準との関係
第5回	農業部門：過去から現在までの動きと、将来の農業・農村の発展と衰退
第6回	ASEANで農業を守る重要性和農家を守る非効率性
第7回	ASEANの工業化の変遷：雁行形態型経済発展論の第2モデル
第8回	ASEANの工業化の変遷：雁行形態型経済発展論の第1モデル
第9回	中間まとめ：これまでの産業発展のモデルとこれからの産業発展のモデル（時代の変化についてのSWOT分析）
第10回	ASEANにおける「日系企業」：サプライチェーンとして位置づけられるASEANの製造業
第11回	ASEANは今後も「サプライチェーン」の一角なのか？
第12回	ASEAN主要国の第三次産業（特にサービス産業化）の状況と「日本ブーム」
第13回	ASEANの「日本ブーム」は今後も続くか
第14回	ASEANの「4.0産業」と産業高度化を実現する上でのチャンスと制約
第15回	まとめ

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	15%
レポート	69%
その他	16%

成績評価の方法（コメント）	（１）試験は、定期試験が実施されないため、試験と同等の内容の出題を短期間で解くもので代替し、最終回の講義時に出題する。この提出がなかった場合は、「試験未受験」と同等として扱う（すなわち、単位付与はなされない）。 （２）レポートの５９点については、①授業後課題（８回程度、配点３４％）、②毎回の授業の途中ないし終了時に数分程度の小クイズに取り組み、その点数をレポート点として付加（配点２０％）、③１，３００字程度のレポートが１本（配点１５％）。 （３）上記（２）②への解答をもって、授業に積極的に臨む取組の表明とみなし、その他点を適宜配分する。 （４）公欠や病欠、就職活動を理由とする欠席の場合は、大学ないし就職活動先が発行する何らかの書類を提示した場合に限り、その他点について配慮する。 （５）人工知能（ＡＩ）については、効果的に用いることを学生には奨励する。したがって、ＡＩを用いてよい課題と用いてはいけない課題を明確に分け、ＡＩ使用禁止の課題でＡＩを使用した場合は、その後の課題等に対して一切の配点をしないこともあり得る。
---------------	--

参考文献	『アジア経済読本』第４版 渡辺利夫編 東洋経済新報社 『キャッチアップ型工業化論－アジア経済の軌跡と展望』末廣昭著 名古屋大学出版会 『タイでのビジネスプロトコル』今井宏著 バンコク日本人商工会議所発行 『新興アジア経済論－キャッチアップを超えて』末廣昭著 岩波書店 その他、各回講義に関連する参考文献等は、その都度紹介する。
事前および事後学習の指示	事前学習：日頃、新聞の経済欄や経済関係の社説等を読み、経済の議論においてよく用いられている語句を理解するとともに、どのような日本企業がアジアのどの国に進出しようとしているかを把握し、傾向を掴むことが有益である。 事後学習：授業に出て講義資料に書き込んでいくだけでは理解できない点も多くなることが考えられる。そのため、授業の中で強調された用語や理論を、参考文献なども頼りに、事後に十分に確認しておくことが望まれる。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間

講義コード	16D0770000
講義名称	サプライチェーンマネジメント　＜春＞
科目英文名	Supply chain management
開講責任部署	経営学部　経営学科
代表ナンバリングコード	INFS3401
単位数	2.0
時間割	春学期: 火曜日 2 時限
講義開講時期	春学期

担当教員

氏名
岳　理恵

授業形態	講義 アクティブラーニング パソコン実習 実務経験のある教員による授業① IEを取り入れたビジネスシステムの改善経験を有する教員がこの科目を担当する。
------	---

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 協同・協調学習(グループ・ワーク、チームワーク、ペアワーク) ディベート(討論、討議)
---------------	--

講義・演習概要	本講義は、ケーススタディを通して、サプライチェーンマネジメントの基本知識を習得し、SCMを俯瞰する力とその実践力を身に付けることを目的とする。 講義では、サプライチェーンマネジメントの基本構成に着目し、必要なツール・手法を中心に種々の応用事例を紹介しながら解説する。また、在庫管理等の経営意思決定に関する基本手順や、企業内部・外部またはS C Mの業務横断による実行と管理に必要な専門知識も重点的に解説する。
学習（到達）目標	シミュレーション技法等のICTツールを用いて自主的な提案・評価を行いながら、SCMに関する経営意思決定の実践力を身に付ける。

講義・演習計画

回	内容
第1回	イントロダクション
第2回	SCMとは
第3回	SCMシステムの基本構成
第4回	企業内統合と企業間統合
第5回	ERP（1回目小テスト）
第6回	在庫管理の基本的な意思決定事項
第7回	経済的発注量
第8回	定量発注方式
第9回	定期発注方式（2回目小テスト）
第10回	SCMにおけるデジタル技術の活用
第11回	シミュレーション技法
第12回	SCMのシミュレーションモデリングー在庫モデル
第13回	シミュレーションによるSCMのシステムデザイン
第14回	線形計画法との比較
第15回	授業統括(最終レポート)

成績評価の方法（コメント）	課題提出（40％）、小テスト・レポート（60％）を総合して学習到達度の観点から評価する。ただし、最終レポートを提出されなければ、失格となり、成績判断対象外となりますので、ご注意ください。
---------------	---

参考文献	講義レジュメをM-Portにて配布する。
事前および事後学習の指示	WindowsをインストールしたノートPCを1台準備してください。ノートPCに十分充電されたかどうかについても、必ず心掛けるようにしてください。 授業予定内容を確認するには、M-Port ⇒「WebClass」⇒「経営情報とサプライチェーンマネジメント」⇒「__回目」の順にアクセスしましょう。「_回目」のすぐ下になる「アジェンダ」と書いているメモ書きは、予定授業内容の目次となりますので、漏れなく学習するために、毎回の学習をスタートする前に、必ずご確認ください。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間

講義コード	17E5160000
講義名称	現代英語圏文化の諸問題-フィクションと社会A　＜春＞
科目英文名	Topics in English-Fiction and Society A
開講責任部署	国際教養学部　英語・国際文化学科
代表ナンバリングコード	CULT3400
単位数	2.0
時間割	春学期: 火曜日 2 時限
講義開講時期	春学期

担当教員

氏名
谷山　智彦

授業形態	講義	アクティブラーニング
------	----	------------

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 コメントシート	小レポート/小テスト
---------------	---	------------

講義・演習概要	「小説」は想像の産物であり、創作物である。フィクションであるが、その背景には多くの場合、創作された時代の社会の「空気」や「社会問題」がある。本講義では、「小説」と作家を通して、異文化である英語圏が現代にいたるまで抱えてきた社会諸問題を概観する。
学習（到達）目標	英語圏といっても多様であるが、本講義では英国、米国を中心に据え、作品と諸問題を見て行く。英語圏社会が現在に至るまで抱えてきた男女両性の不平等や経済格差、異文化との対立などの諸問題に触れることで、より異文化への理解を深めるものとする。また、部分的に英語原典にも触れ、英語力も養成するものとする。

講義・演習計画

回	内容
第1回	初回オリエンテーション、授業の流れや成績評価について 英語圏の小説の始まりについて
第2回	18世紀の英国小説 市民社会と読者の誕生 ダニエル・デフォー「ロビンソン・クルーソー」①
第3回	ダニエル・デフォー「ロビンソン・クルーソー」②
第4回	18世紀の政治と風刺の文学 ジョナサン・スウィフト「ガリバー旅行記」①
第5回	ジョナサン・スウィフト「ガリバー旅行記」②
第6回	19世紀の英国小説 貧困・経済格差の時代 チャールズ・ディケンズ「オリバー・ツイスト」①
第7回	チャールズ・ディケンズ「オリバー・ツイスト」②
第8回	アメリカ合衆国の文学の始まりと発展 19世紀の米国小説 アメリカの抱える諸問題 エドガー・アラン・ポー「黒猫」①
第9回	エドガー・アラン・ポー「黒猫」②
第10回	20世紀の米国小説 スモールタウンとアメリカ シャーウッド・アンダーソン「ワインズバーグ・オハイオ」①
第11回	シャーウッド・アンダーソン「ワインズバーグ・オハイオ」②

第12回	20世紀の英国小説 全体主義、管理社会の恐怖 ジョージ・オーウェル「1984年」①
第13回	ジョージ・オーウェル「1984年」②
第14回	20世紀の英語圏小説 海外植民地から欧米圏への視点 チヌア・アチェベ「崩れゆく絆」①
第15回	チヌア・アチェベ「崩れゆく絆」② まとめ

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	
レポート	50%
その他	50%

成績評価の方法（コメント）	主な成績評価は、授業内で行う記述式の小課題、学期中間で行う中間レポートの提出と期末提出のレポート、最後のまとめの授業で行う最終まとめ授業内課題の総合評価で行います。
---------------	--

参考文献	石塚久郎 責任編集『イギリス文学入門』三修社 2014年 諏訪部浩一責任編集『アメリカ文学入門』三修社 2013年
事前および事後学習の指示	ある程度小説の内容は授業内で概説するが、授業で扱う物語の概要を事前に簡単に把握しておくことが望ましい。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間
キーワード	英語文学 社会問題

講義コード	1C02270000
講義名称	歴史学 [2] -ヨーロッパ統合史　＜春＞
科目英文名	History-EU Integration and European Societies
開講責任部署	共通教育機構
代表ナンバリングコード	HIST1000
単位数	2.0
時間割	春学期: 火曜日 2 時限
講義開講時期	春学期

担当教員

氏名
豆原　啓介

授業形態	講義	アクティブラーニング
------	----	------------

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 コメントシート
---------------	---

講義・演習概要	現在に至るヨーロッパ統合の歴史的展開について概観しその流れを把握するとともに、国際政治史を読み解く上で必要な概念を理解することを目的とする。高校の世界史や地理の教科書では第二次大戦後に始まったとされるヨーロッパ統合の理念的萌芽は近世にまで遡り、二度の大戦を経て機が熟した末に実現された試みである。ヨーロッパ統合史を学ぶとは、ともすれば当然視しがちな現代の国家のあり方を問い直すことでもあり、これが本講義の究極的な目標である。また、期末試験の他に抜き打ちで小テストを行う。
学習（到達）目標	・ 19世紀から現在に至るまでのヨーロッパ統合の歴史的な流れを把握する。 ・ ヨーロッパ現代史の基本的な知識を習得する。 ・ 国際政治の初歩的な概念について理解する。

講義・演習計画

回	内容
第1回	イントロダクション
第2回	ウェストファリア条約と主権国家の誕生
第3回	フランス革命と国民国家/ナショナリズム
第4回	第一次世界大戦の衝撃
第5回	戦間期のヨーロッパ統合構想とその挫折
第6回	第二次世界大戦/国連の意義と問題点
第7回	シューマン・プランとECSCの成立
第8回	EEC創設と関税同盟の機能/EECへのイギリス加盟問題
第9回	ヨーロッパ統合関連文化企画(映画鑑賞を予定)
第10回	ヨーロッパ共同体からヨーロッパ連合へ
第11回	冷戦の終結とEUの東方拡大
第12回	ユーロの誕生とギリシャ・ショック
第13回	シェンゲン条約と移民・難民問題
第14回	イギリス離脱問題と「民主主義の赤字」
第15回	期末試験およびまとめ

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	90%
レポート	0%
その他	10%

成績評価の方法（コメント）	試験： 90% その他：10% （コメントカードなど）
---------------	--------------------------------

参考文献	遠藤乾編『ヨーロッパ統合史』名古屋大学出版会、2008年。
事前および事後学習の指示	事前学習は特に必要とはしないが、歴史科目という特性上理解すべき事項が多岐にわたるために一回の授業が終了する都度、各自が復習し理解の上で次回の授業に臨むことが望まれる。また積極的にヨーロッパ関連の時事ニュースなどをチェックし、講義で扱った内容と関連づけながら各自でヨーロッパ統合に関する理解を深めてほしい。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間

講義コード	1C26060000
講義名称	自然科学入門－生物の多様性　＜春＞
科目英文名	Introduction to Natural Science-Biodiversity
開講責任部署	共通教育機構
代表ナンバリングコード	NUSC1000
単位数	2.0
時間割	春学期: 火曜日 2 時限
講義開講時期	春学期

担当教員

氏名
巖　圭介

授業形態	講義	アクティブラーニング
------	----	------------

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 コメントシート	小レポート/小テスト
---------------	---	------------

講義・演習概要	人間は常に自然の恵みにより生かされてきた。その恵みの源には、この地球上に存在する極めて多様な生き物の営みがある。いったいどれほど多様な生物がこの地球に存在するのか、なぜこれほど多様な生物が生きているのか、常に多様化を目指す命の営みを紹介するとともに、その生物たちの多様性がもたらす人間の利益と、その多様性が危機にさらされている実態について取り上げる。
学習（到達）目標	・生物の多様性について、その意味と人間にとっての意義を簡単に説明できる。 ・生物多様性を守る取り組みについて説明できる。

講義・演習計画

回	内 容
第1回	普遍性と多様性　多様性とは
第2回	地球上にどれだけ多様な生物が生きてきたか
第3回	生物多様性3つの側面
第4回	地球上には何種の生物が生きているか
第5回	生物の分類
第6回	生態系を構成する生き物たち
第7回	環境に適応する生物の進化
第8回	進化と自然選択
第9回	有性生殖と多様性
第10回	性選択がもたらす多様性
第11回	生物多様性の恩恵
第12回	生物多様性をおびやかすもの
第13回	生物多様性の利益を守る
第14回	私たちに何ができるか　最終確認テスト
第15回	最終テスト解説と授業ふり返り

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	100%
レポート	0%
その他	0%

成績評価の方法（コメント）	毎回の受講を確認するための小テストや小課題への回答と、最終確認テストを合わせて評価する。その他コメントや情報提供についてはボーナスポイントを付与する。
---------------	---

参考文献	必要に応じて授業中に示す
事前および事後学習の指示	授業では板書の負担を軽減するため穴埋めプリントを配付するが、その穴を埋めるだけではなく、講義を聞きながらノートを取り、配付資料の内容と授業後に統合して整理することで、はじめて十分な理解ができるはずなので、次の授業までにきちんと復習をすること。また翌週のテーマに関連した課題が出た場合には自分で調べておくこと。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間
キーワード	生物多様性 進化 適応 生態系 環境